

全国学力・学習状況調査から分析する本校の強みと弱み

令和5年度 大津市立皇子山中学校

【調査結果の概要】

〔教科に関する調査（国語・数学・英語）から読み取れる成果と課題〕

○国語については、平均正答率が全国を4.8ポイント（県を2ポイント）下回っており、知識及び技能の観点では「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」の正答率が低くなっている。ただ「言葉の特徴や使い方に関する事項」の正答率は全国・県平均を大きく上回り、特に漢字の書き方や語句の理解についての正答率が高くなっている。また思考力・判断力・表現力等の観点では「話すこと・聞くこと」の正答率が県平均を上回り全国平均と同程度であるが、「書くこと」と「読むこと」については全国・県平均を下回っている。それぞれの設問の正答率から分析すると、「書くこと」では根拠を明確にして自分の考えが伝わる文章を書くこと、「読むこと」では観点を明確にして文章を比較し叙述を基に要旨を把握することに課題をもつ生徒が多くいるのが読み取れる。

○数学の平均正答率は全国を2ポイント（県を1ポイント）下回っているが、学習指導要領の領域では「数と式」「図形」「関数」で県平均を上回っている。「データの活用」領域の正答率が大きく下回るのは、設問7（1）四分位範囲についての正答率が20ポイント以上低くなっているのがその原因であり、第2学年の学習内容である「四分位範囲と箱ひげ図」などの復習の機会を設ける必要がある。「知識・技能」の観点では自然数や反比例の意味を理解しているか、「思考・判断・表現」の観点では結論が成り立つための前提や事柄を見いだして証明することができるかを問う設問で正答率が高く、全国・県平均を大きく上回っている。

○英語については、平均正答率が全国を0.6ポイント（県を1ポイント）下回っている。特に学習指導要領の領域「聞くこと」「読むこと」の正答率が高くはなく、「聞くこと」では目的に応じて正確に情報を聞き取ることができるか、「読むこと」では文と文の関係から必要な情報を正確に読みとることができるかなどの設問で正答率が低い。一方で領域「書くこと」の正答率は全国・県平均を上回っており、未来表現の肯定文や疑問詞を用いた過去形の疑問文、依頼表現への書き換えなどの正答率は高い結果となった。

また解答をタブレット端末に録音・送信して行った領域「話すこと」の調査では、全国的に無解答率が2割前後に上り、1問も正解できない生徒が6割をこえる結果であった。本校の調査結果もそれに近く、話すことが苦手であることは明らかであるが、調査結果から具体的な改善点を見いだすことはできなかった。

○国語・数学・英語ともに、学習に対する意欲や関心が低下している傾向がみられた。全国・県平均と比較すると、「勉強は好きですか」「授業の内容はよく分かりますか」の設問に対して肯定的な回答は多くはなかった。コロナ禍で本校が長年積み重ねてきた「学び合い」学習ができず、一斉授業で知識伝達型の学習形態が多くなったのがその一因であると考察する。校内研究を中心に授業改善をして、本来の本校の強みを取り戻したい。

〔生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査から読み取れる成果と課題〕

○「朝食」「就寝時刻」「起床時刻」「家庭での新聞や本」などを問う設問では、毎日の規則正しい生活習慣や読書習慣が定着しているとはいえない回答であった。生徒指導や保健指導の中で、望ましい生活習慣について、これまで以上に生徒にはたらきかける機会をつくりたい。

○「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはありますか」「将来の夢や目標を持っていますか」などの設問に対して肯定的な回答が多く、未来に力強く歩みを進める本校生徒の強みが読み取れる。また一方で「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」「友達関係に満足していますか」の設問の回答からは、他者との関わり方や集団づくりに対する課題が伺える。活動の制限が緩やかになる中、本校本来の強みである生徒会活動や学校行事などを通して、他者との望ましい関係づくりを構築させていきたい。

○学級活動や道徳の授業に関する回答では、コロナ禍以前に本校が推進してきたグループや学級で話し合う活動を、今一度充実させる必要があることが読み取れる。課題に対して話し合う中で、自分の考えを深めたり、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めるなど、学校教育の基盤となるコミュニケーション力を高める教育活動を推進したい。